

那珂川の河川環境に対する住民意識の変遷に関する調査研究：
'88年、'95年、および'02年の比較

九州産業大学工学部土木工学科 学生会員 〇前原暢仁 九州産業大学工学部土木工学科 正会員 山下三平
九州産業大学工学部土木工学科 非会員 久下本勝 九州産業大学工学部土木工学科 非会員 嶽村繁樹
九州大学工学部地球環境工学科 非会員 川畑理恵

1. はじめに 人々にとって好適な環境を整備するためには、環境の変化と人々の環境に対する評価意識との関係を把握する必要がある。多くの環境意識調査では、この関係を一度限りの調査で探究することを試みてきた。しかし、それは相関関係の記述には有効ではあるが、その結果から環境のあり方と人間の評価の両者の因果関係に言及するべきではない。そこで、時を隔てて同様の意識調査を繰り返し、環境変化との因果関係を明らかにすることができる縦断的調査が必要であり、本研究はその方法を採用するものである。

本研究では1988年と1995年におこなった都市河川那珂川を対象とした沿川住民の意識調査の結果を踏まえ、2002年に同じ形式の調査を行い3者の比較、検討をおこなう。それにより環境変化と沿川住民の那珂川に対するイメージや、利用形態がどのように変化したのかを把握し、住民の那珂川に対する意識評価の変化を明らかにするものである。

2. 調査対象地域の概要 調査の対象地域は、福岡の中心市街地中州・天神地区を貫流する代表的都市河川である那珂川の中・下流域とした。調査地域は河口から現人橋(河口から約13 km)までで、那珂川兩岸から約1 kmを目安に幹線道路や鉄道、行政区分などを境界として設定した。その調査地域を人口規模がほぼ均等になるように15のゾーンに分けた。調査結果の精度は1988年が±1.196%、1995年は±1.061%、2002年が±1.135%である。

3. 住民の那珂川に対する評価 調査票の質問項目の概要を表-1に示す。本報ではいわゆる親水体験ではなく比較的人に負担を与える川体験と河川に対する評価との関係を調べる。これにより環境変化と意識評価の因果関係を、河川環境におけるトータルな経験として明確にすることができる。そこで特に全調査項目の中から、〈E:水害体験の有無〉、〈G:河川に関する活動〉のうち清掃活動への参加の有無、および〈F:個別的评价〉に注目する。

表-1 調査項目の概要

A	属性 (年齢・居住年数・性別・職業)
B	利用目的 (小学生時代・現在及び将来 (の期待))
C	イメージ (小学生時代及び現在)
D	利用頻度 (小学生時代及び現在)
E	水害体験の有無
F	個別的评价 (大濠公園との好感度比較・愛着度・母親恩恵・資源恩恵)
G	河川に対する活動 (町内会の役員・清掃活動への参加・仕事での河川利用)
H	その他 (最近見た魚・「ふるさとの川モデル河川」への指定・前回調査への参加)

まず、図-1に水害体験の有無を、図-2と図-3に小学生の頃の清掃活動への参加と最近の清掃活動への参加の状況を示す。これらの図から、水害に遭ったことのある人の割合は減少傾向にあるが、依然3割以上の人々が水害を体験していることがわかる。また、清掃活動へ参加した人の割合が、1988年と1995年では変化が見られなかったのに対し、2002年調査では有意(0.1%水準)に増加していることがわかる。

図-4と図-5の那珂川と大濠公園の好感度比較と那珂川に対する愛着度に関する回答では、1988年、1995年、および2002年の間に全体の形に一貫した変化の傾向性が見られないが、図-6と図-7に示す那珂川からの景観面での恩恵と水資源面での恩恵がどの程度あるかという質問に対する回答では、年を追うごとに恩恵があるという方から恩恵が無いという意見の方に推移する傾向が見られる。

水害体験、小学生の頃の清掃活動への参加、および最近の清掃活動への参加の3項目と那珂川に対する評価項目との間で分散分析を行い、その結果を表-2に示す。この表において、平均値の値が1に近いほど評価

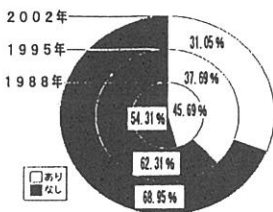


図-1 水害体験の有無

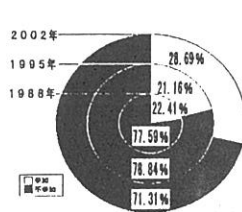


図-2 小学生の頃の清掃活動への参加

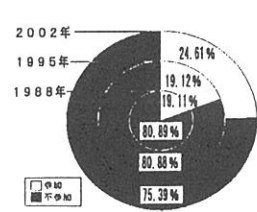


図-3 最近の清掃活動への参加

が高く、5に近いほど評価が低いことが示されている。

大濠公園との比較では、1988年では小学生の頃の清掃活動の有無と最近の清掃活動の有無、1995年では水害体験の有無と最近の清掃活動の有無、2002年では最近の清掃活動の有無で、それぞれ平均値に有意な差がある。また、那珂川に対する愛着では、1988年と1995年では全ての項目で、2002年では水害体験の有無と最近の清掃活動の有無で平均値に有意な差がある。那珂川からの景観面での恩恵では1988年では全ての項目で、1995年と2002年では水害体験の有無と最近の清掃活動の有無で平均値に有意な差がある。那珂川からの水資源面での恩恵では、1988年と1995年では水害体験の有無と最近の清掃活動の有無で平均値に有意な差がある。

このようにとりわけ最近の那珂川の清掃活動に参加することが本報で扱った評価項目に特に関連が強いことがわかる。また、最近の清掃活動へ参加した人の評価が、那珂川に対する愛着度と那珂川からの景観面での恩恵で年々高まってきていることがわかる。

4. まとめ 本研究では那珂川を対象にし、その環境に関する沿川住民への意識調査をおこない、その結果を1988年と1995年実施した同じ調査の結果と比較し、周辺環境と住民の意識や行動の変化を明らかにしようとした。その結果、水害に遭ったり、最近の清掃活動へ参加すること、川に愛着を感じ、川から恩恵を受けていると実感するようになることとの相関が示された。

また、最近清掃活動へ参加した人の割合は増えているが、那珂川に対する最近の評価は大濠公園との比較を除き、否定的になる傾向が示された。したがって住民の意識は、全体として川により関心を持つグループと、川から離れていくグループに2分されつつあると考えられる。

今後の課題は、住民意識の変化の原因を環境の変化や社会背景の変化などの面から探ることである。

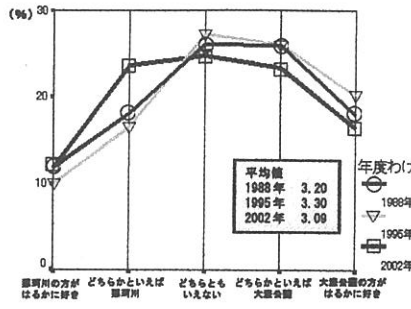


図-4 那珂川と大濠公園の好感度比較

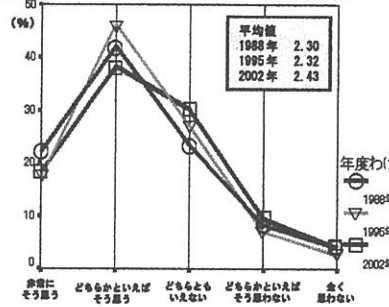


図-6 那珂川からの景観面での恩恵

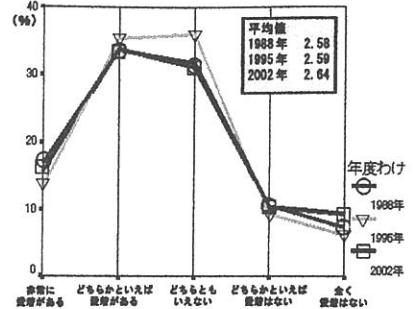


図-5 那珂川に対する愛着度

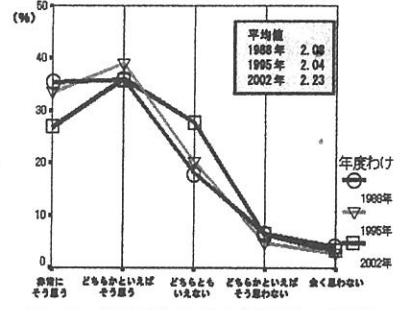


図-7 那珂川からの水資源面での恩恵

表-2 評価影響項目と評価項目

大濠公園との比較						
平均値	水害体験の有無		小学生の頃の清掃活動の有無		最近の清掃活動の有無	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし
1988年	3.17	3.22	3.01	3.24	**	2.92 3.26 ***
1995年	3.37	3.28 *	3.22	3.32		3.03 3.38 ***
2002年	3.16	3.06	3.13	3.06		2.68 3.23 ***

那珂川に対する愛着						
平均値	水害体験の有無		小学生の頃の清掃活動の有無		最近の清掃活動の有無	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし
1988年	2.48	2.65 **	2.37	2.61 ***	2.20	2.66 ***
1995年	2.50	2.66 ***	2.45	2.63 ***	2.20	2.69 ***
2002年	2.48	2.72 ***	2.64	2.64	2.11	2.82 ***

最近の那珂川からの恩恵(満い・景観面)						
平均値	水害体験の有無		小学生の頃の清掃活動の有無		最近の清掃活動の有無	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし
1988年	2.20	2.38 ***	2.14	2.35 ***	2.14	2.34 **
1995年	2.21	2.38 ***	2.28	2.33	2.06	2.38 ***
2002年	2.24	2.51 ***	2.48	2.44	1.98	2.58 ***

最近の那珂川からの恩恵(水資源・水利用面)						
平均値	水害体験の有無		小学生の頃の清掃活動の有無		最近の清掃活動の有無	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし
1988年	1.97	2.18 ***	1.99	2.09	1.89	2.13 ***
1995年	1.85	2.16 ***	2.03	2.05	1.79	2.10 ***
2002年	1.98	2.34 ***	2.33	2.21 *	1.91	2.34 ***

有意水準 5% : *
1% : **
0.1% : ***